

博士論文タイトル： 実践感覚と行為者の能動性－ハビトゥス論の再検討－

著者： 村田，賀依子

論文内容の要旨

本論文は、フランスの社会学者ピエール・ブルデューのハビトゥス論について内在的に検討して、新しいハビトゥス理解、新しいブルデュー理解を提示することをめざしたものである。ブルデューのハビトゥス概念は、客観主義／主観主義、社会／個人、無意識／意識、条件づけ／自由といった二元論を乗り越えようとしたものだが、客観主義や社会の側に偏ったものであると批判されることが多い。本論文は、ハビトゥスと非常に深く関わるものでありながらこれまで十分に検討されることのなかった「実践感覚 (sens pratique)」をめぐるブルデューの議論に注目することで、ブルデューの議論の「内から」ブルデュー理論の問題点を乗り越えること、ブルデュー自身の議論のなかに能動的で創造的な行為者を探し出すことを試みようとしたものである。

第 1 部では、先行研究を踏まえてハビトゥス概念の重要性と問題点が洗い出され、問題点の乗り越えの道が探求される。

第 1 章では、ブルデューがハビトゥス概念によって社会構造と行為者をつなぎ、客観主義的人間観・主観主義的人間観それぞれの限界を乗り越えようとした道筋がフォローされている。

第 2 章では、ハビトゥス概念にたいする評価と批判が整理される。ブルデュー自身は、ハビトゥス概念によって社会／行為者の二者択一に陥らずにすむと主張していたにもかかわらず、多くの論者たちは、ハビトゥス概念では行為者側についての説明が不十分だと批判し、意識、反省、行為者、agency など、ブルデュー理論に不足している点を補おうとする種々の試みがなされていることを描いている。

第 3 章では、著者がハビトゥス概念をどのように評価し、どう対処していくか、その方向性が示される。著者も、先行研究と同様、ブルデュー理論やハビトゥス概念には、行為者の能動性や創造性がどのようにして可能になるのか、そのメカニズムがはっきりしないという問題を抱えていることを認めたとはいえ、先行研究とは別の対応をする必要があると主張する。主観・行為者の側についての議論を補うことでブルデュー理論を補完しようとする先行研究の方向性は、ハビトゥスについての「狭い」理解を固定してしまう。これにたいして、著者はブルデュー理論やハビトゥス概念は「開かれた」ものであり、新たな解釈の可能性が残されていることを示そうとする。ブルデューの思い描いた二元論の乗り越えを理解する手掛かりがブルデューの議論のなかにあり、いわば「内から」ブルデュー理論を発展させる余地があるはずだという。本論文は、行為者の実践が社会構造に規定されながらも能動的に・創造的におこなわれるメカニズムを明らかにする手がかりを、ブルデュー自身の議論のなかに探してみようとするものなのである。「実践感覚」こそ、著者が手掛かりとするものである。実践感覚やゲームのセンスについての議論のなかに、能動的で創造的な行為者像を探ることが可能だとされる。

第 2 部において、実践感覚に着目してブルデューを読みなおす作業がおこなわれている。

第4章と第5章では、ハビトゥスや実践感覚についての新たな理解の可能性を探るために、ブルデューが sens の多義性（意味と方向）を活用しながら実践感覚についての議論を展開していることに着目する。まず第4章では、意味としての sens と実践感覚の関係の議論を読みなおしている。そして、主観的意味と客観的意味との関係を読み解いていくことによって、実践感覚は、単なる身体化された感覚を指すだけではなく、主観的意味と客観的意味を照らし合わせつづける「過程」をも示していることが論じられる。

第5章では、方向としての sens と実践感覚の関係について考察される。ここでは未-来（à-venir/à venir）が中心的に論じられ、現在のなかで未-来を先取りする実践感覚には、現在のなかにある次の展開の具体的なきざしへの行為者の絶え間ない注意が含まれていることが示される。そして、実践感覚による未-来の先取りは、身体化した過去にもとづく感覚によって、未-来をただ与えられるようなものではなく、行為者が現在に能動的に注意を向けるなかで身体化した過去を活性化し未-来のきざしを現在のなかにつかむ能動的な過程であることが明らかにされる。

第2部のまとめである第6章では、本論文がブルデューのなかに見いだした実践感覚による実践の過程の核心にいる行為者、すなわち、現在の時点において具体的対象や客観的世界に注意を向け、そこに意味や未-来を探そうとする能動的で創造的な行為者こそが、完全な決定論でも、完全な自由を思い描くものでもなく、決定されながらも自由な行為者、二元論を乗り越える行為者であることが主張される。

終章では、本論文での著者のブルデュー読解の射程について述べられている。新しい行為者像の基礎となっていたのが、実践感覚、すなわち「感じること」である点は重要であり、今後、本論文の先に、「考えること」より「感じること」を基礎にした、二元論を乗り越えた新しい行為の理論、社会学理論の可能性が開かれていると著者は主張する。著者の試みは、ブルデューの理論を、ブルデューを越えて理解することを可能にするものであることが強調される。

博士論文タイトル： 実践感覚と行為者の能動性－ハビトゥス論の再検討－

著者： 村田、賀依子

論文内容審査の結果の要旨

本論文は、ピエール・ブルデューの社会学理論について、その鍵概念であるハビトゥス概念に焦点をあてて検討し、新しいブルデュー理解、新しいハビトゥス理解の可能性を、綿密なテクストクリティークにもとづいて探ろうとしたものである。そして、この作業をとおして、二元論の問題に取り組み、二元論を乗り越えるために必要な人間観および行為観を練りあげ、単なるブルデュー解釈にとどまらず、新たな社会学理論構築の可能性をも展望している。

ブルデューは、ハビトゥス概念によって、客観主義／主観主義、社会／個人、無意識／意識、連続性／変化といった二元論を乗り越えることを目指した。彼の理論やハビトゥス概念は高く評価される一方で、依然として二元論の一方の項である客観主義、社会、再生産の側に偏っていると批判されることも多い。ハビトゥス概念は、行為者が能動的に実践しているさまを描くには不向きな概念として評価されてきたのである。この点をめぐって、多くの先行研究では、ブルデューに不足しているものを補う試みがさまざまにおこなわれてきた。本論文の著者も、ブルデューの議論やハビトゥス概念を無条件に評価するものではない。著者も、ブルデューの議論では、行為者が社会に規定されながらどのように能動的であるのか、どのように創造性を発揮するのかについて明快な説明が十分になされているとは言えないとしている。しかし、ブルデューの議論の問題点をどのように乗り越えるのか、そのためにいかなるアプローチをとるのかという点において、本論文は多くの先行研究と異なった道をとる。この点がきわめて新鮮である。

著者は、ブルデュー理論に欠如しているものを「外から」補うのではなく、ブルデューの議論の「内から」行為者についての議論を「引き出す」方法を選ぶべきであると主張している。ブルデューとともに、ブルデューに抗して、というスタンスである。ブルデュー自身、みずからの理論は整理され体系だったものではなく、諸概念についても「開かれた」ものである必要があると主張しているように、諸概念に厳密な定義がなされているわけではない。したがって、客観主義的なものとしてブルデュー理論の理解を固定するのではなく、ブルデューの議論を積極的・創造的に解釈し、ブルデュー理論の「内から」問題点を乗り越える余地があると考えることが可能であり、また必要でもあることを、著者は強調している。そして、このことを著者は、ブルデューの諸著作を渉猟しつつ、綿密かつ周到的なテクストクリティークにもとづいて根気よく論じていく。ここに本論文の真骨頂がある。

著者が注目するのがブルデューの「実践感覚 (sens pratique)」概念である。実践感覚は、これまでの多くの研究においては、ハビトゥスの単なるたとえである、あるいは、ハビトゥスによる行為が無意識的・身体的におこなわれることを示す概念であると理解されてきた。本論文は、実践感覚の「sens」の多義性（感覚・意味・方向）を利用しながらブルデューがおこなっている議論に注目し、たんなる身体的感覚ではない、世界に意味と方

向を見出す「実践的理解の原理」としての実践感覚という論点を、説得的に引き出している。そして、通説とは異なって、ブルデューのなかに能動的な行為者を見出すことが可能になることを論証している。

著者の読解によれば、実践感覚は、身体化された過去の経験にもとづいた感覚的な知というだけではなく、主観的世界と客観的世界を行為者が照らし合わせつづける過程、行為者が自らの注意によって意味や方向を見出す能動的な過程だととらえられる。著者によって見出された行為者の「能動性」とは、一般的にイメージされる能動性とは異なる。むしろ一般的なとらえ方こそ変更の必要がある、というのが著者の主張である。具体的で客観的な世界への行為者の能動的なかわりと身体化された過去・社会構造による構造化は、互いを制約しながら互いを可能にするというかたちで「車の両輪のように」成立するのである。構造化から独立して行為者の能動性が成立するわけではなく、また、行為者の能動性と無関係に構造化が可能になるわけでもない。ブルデューの議論にたいする従来の理解では社会による構造化の部分だけが強調されて理解されてきたが、この「構造化」は「行為者の能動性」とセットになってはじめて生じるものであり、逆に、ブルデューの議論に不在だと言われていた「能動的な行為者」は「構造化」のなかにこそ見出すことができる。この逆説的な主張こそ、本論文がブルデューのなかから引き出した新しい論点である。

意識／無意識の二元論の問題についても、とらえ方の刷新の必要性が主張される。実践感覚によって行為者がおこなう行為は、これまで理解されていたように無意識・自動的になされるものではなく、行為者が世界に注意を向け、世界をはっきりと意識することによってなされるものである。しかしこの意識は、自分に向かう意識（自己への反省）ではない。最近の社会学においては **reflexivity** 概念などによって自己についての反省が強調される傾向にあるが、実践感覚に見出される意識はそのような自己に向かう意識ではない。実践感覚によって行為者が行為するときには、世界に向かう意識がともなっている。実践のなかでは、意識は、自己をある意味で「忘れる」「意識しない」ことによって成立するのである。意識についても能動性についても、これまでハビトゥス概念に不在だとされていたものは、これまでと発想を変えることによってブルデュー理論のなかに見出すことが可能になる。むしろ従来の発想を変える必要があることが、積極的に主張されているのである。

本論文がブルデューの実践感覚をめぐる議論のなかに見出した意識的で能動的な行為者の像は、二元論を乗り越えるためには客観主義／主観主義などの二元論のなかで考えられていた主観や行為者、主体、意識の観念を根底から再考しなければならないことを示している。このような発想の転換は、「実践感覚」、すなわち、意味や方向を「感じる」ことの重要性に目を向けることによってはじめて可能になった。キーワードである「能動性」概念などにはもう少し厳密な議論が必要ではあるが、ブルデューのプロブレマティークの内部に踏みとどまりそのポテンシャルを最大限引き出そうとした本論文は、それを裏づけるテクストクリティークの綿密さとともに、学説研究の優れた試みとして評価できるだろう。

一方、ブルデューの本領は経験的研究にあるという見方も可能であるので、本論文で示されたブルデュー読解によってブルデューの全体像を書き換えることができるかどうか、今後、さらに読みを洗練させつつ、研究を進めていくことが期待される。

なお、本論文は、査読付きの学術誌（『ソシオロジ』ほか）に掲載された3本の既発表論文をもとにしたものであり、社会生活環境学専攻社会・地域学講座の社会学分野の学位取得基準を十分に満たしている。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるのに十分な内容を有していると判断した。